

遊園地

津村節子

中央公論社

遊園地

●換印廃止
一九八〇

定価 一一〇〇円

昭和五十五年八月十五日印刷
昭和五十五年八月二十日発行

著 者 津 村 節 子

発行者 高 梨 茂

印 刷 三 晃 印 刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話 (五六一) 五九二一
振替東京二、三四

雪 の 柩	鴛 鴦	涅槃	誕生 日	兎 の 耳	花 茨	旅 立 ち	遊 園 地	目 次
-------------	--------	----	---------	-------------	--------	-------------	-------------	--------

227	197	173	137	99	69	37	5
-----	-----	-----	-----	----	----	----	---

装
幀

三
浦

巖

遊園地

遊園地

母は、庭に女がひそんでいた、と言い張る。

玄関や勝手口の扉は日中も鍵をかけているが、庭に面した居間の縁側のガラス戸は開け放っている。母が夕食の後片付を終えて居間にもどって来たとき、大きな紫陽花の花叢のかけから女が立ち上り、池の傍に置かれている庭園灯の明りを横切って裏木戸の方へ走り去ったのが見えた、というのだ。

母は、半月ほど前も、誰かに見張られているような気がする、と父に訴えていた。気のせいだ、と父は取り合おうとしなかったが、気のせいなどではない、町で買物をしていると、人の視線を感じる。その方向を見ると誰もいない。時折後からつけられているような気がして、急に振り向いてみるのだが、やはりそれらしい人はいない。だが、誰かが自分を見張っているような気がしてならない、と言っていた。

父は、また始まったか、というように眉を顰め、

「いい加減にしないか。そんな筈はないよ。おれはさっきからずっとここにいたのに、何の物音

も聞かなかった」

と言った。

「音なんか、私も聞かなかったわ。まるで風みたいになくなったのよ。でも、ずっと紫陽花のかげにしゃがんでいたんだわ」

「何のためにそんなことをするんだ」

「私たちの様子を窺っていたのよ」

「馬鹿なことを言うもんじゃない」

父は、傍にいた薫に目を走らせると、母をたしなめた。

薫も、夜になると樹木の多い庭の暗闇に何かがひそんでいるような気がして、手洗いへ行くのが怖い。小学校へ入学してからは、独立した部屋を与えられ、一人で寝るようになったのだが、今までのように母を起して、一緒に手洗いについて行って貰うことも出来なくなった。なるべく夕食後はジュースなどの水分をとらぬようにしているのだが、それでも時々深夜に目覚めることがある。庭園灯は、薫のために据えつけたものだ。

母も、この家を気に入っているわけではなかった。父は長男で、祖父母と同居せねばならず、年寄たちがこの家に愛着があるので転居はかなわなかった。建物は古いが、地価は急騰しているから大変な財産だ、と母の妹である「経堂のおばさん」が言っていたのを薫は聞いている。

このあたりの家屋敷は、かなり広い敷地を持っており、庭に若夫婦の近代的な家が建っているのを見かける。代が替って遺産相続の際などに売りに出された家は、忽ち押し倒されて、植木は根こそぎ引き抜かれ、池も埋められてトラクターが地ならししたあとに、数軒から十軒あまりもの新しい小さな家が建てられてゆく。

「無惨なものだな」

と父は言い、住み馴れた界限の変貌を嘆いているが、母は敷地の半分を売って、残りの土地に自分で設計した住み易い家を建てたがっていた。

漸く二年前に祖父の野辺送りは済ませたが、まだ寝たきりの祖母を抱えている母は、食事から下の世話まで手がかかり、家の掃除も思うにまかせない。まして庭などは荒れ放題で、破れた生垣から人がはいり込み、繁るにまかせた植込みのかげに身をひそめることなどは容易だった。

母が妙なことを言い出したのは、去年の秋頃からである。

電話がかかってきて、受話器を取ると、先方はただ押し黙っている。相手の名をたずねても、返事をしない、という。

「間違い電話だろう」

父が言っても、母は納得しない。

「間違いなら、すぐ切るでしょう。息を殺して、じっとこちらの様子を窺っているみたいなの」

「じゃ、いたずらだな」

「いやだわ。一日に何回もよ」

それが何日も続いて、

「気持が悪いわ。ただのいたずらかしら」

母は不安そうに眉をひそめた。

「あなた、心当たりない？ 気まぐれのいたずらにしては、しつっこ過ぎるみたい」

「おれに、そんな心当たりがあるわけではないだろう」

父は強い語調で否定した。

「じゃ、今度電話に出てみてよ。あなたの声が聞きたいのに、私が出るから何も言わずに切るんじゃないの」

「しかし、日中おれの留守にもよくかかってくると言うじゃないか。おれが目的ではあるまい。勝手に妙な臆測するのは止めてくれ」

「いやね、冗談に言っているのに、変な人。そんなにむきになって」

母は笑いを浮べて言ったが、その眼は本当に笑ってはいなかった。

ある夜、電話に出た母が、ちょうど風呂から上ってきた父の手にいきなり受話器を押しつけたことがあった。父がそれを耳にあてると、母が傍で、

「何か言わなきゃ駄目よ。あなたが出ているということをわからせなくちゃ」

と言った。父が何も言おうとしないので、しきりに母がせかした。

「もしもし、木原ですが」

不本意そうに父が言うのと、母は先方の反応を聞こうとして、受話器に耳を近づけた。父は、すぐ受話器を置いた。

「どうして切ってしまったの」

「先方が切った」

「嘘、女の笑い声でしたわ」

「おまえ、この頃どうかしているぞ」

父は苦い顔をして、二階へ上って行った。

その頃から父と母はよく諍いをするようになった。父が夕食の卓に着くことはまれだったし、薫はそれを常のこととして訝しみもなかったが、母は他家を引きあいに出して帰宅の遅い父を詰るようになった。父は、仕事や交友を口にして弁解していたが、そのうち黙って返事をしなくなった。父が黙ると、母はいきり立ち、薫の存在も忘れて声を高くした。

両親の寝室は、薫の部屋と廊下をへだてた二階にある。薫はこれまで父の帰宅を知らずに眠っていたが、両親の諍いの声で目を覚ませられることが多くなった。母が泣いていることもあった。

暮から正月四日までは、毎日父が家にいて、比較的平穏な日が続いた。

父は珍しく大掃除の手伝いなどし、母はデパートに衣類や食料品の買物に出かけ、おせち料理を作り、大晦日には久しぶりに美容院へも行き、美しくなって帰って来た。

元日には、小ざっぱりした衣服を着せた祖母を居間に運び、家族四人が揃って祝膳に向った。父は終日テレビを観たり、うたた寝をしたりして過していたが、薫がせがむとゲームの相手もしてくれた。

足腰がしっかりしていた祖父が急死して以来、母は寝たきりの祖母を置いて長時間の外出は出来ずにいたが、三日には実家に帰り、一晚泊って晴やかな顔で帰って来た。

だが、風邪をひいて母と一緒に出かけられなかった薫は、母の留守中に父に電話があったことを知っている。父はしきりに、相手をなだめるような口調で長い間喋っていた。何を誰に憚る必要があるのか、その折の父の抑えているような低い声に、薫はかえって奇異な感を抱いたのだった。

正月休みが終って出社し始めた父は、京都の営業所へ出張することになった。母は、正月の名残りの機嫌よさで父の支度を手伝い、鯖ずしと漬物を買って来てくれ、とそれぞれの店の名を忘れぬように念を押したりしていた。

父が帰る日、母が祖母の食事を離れへ運んでいる時に電話のベルが鳴った。薫が出ると、

「ママはいらっしゃる？」

と女の声が伝わってきた。

薫は離れへ母を呼びに行った。

「誰かしら」

「わからない」

「どちらさまですか、と聞くのよ」

母は廊下を小走りに、電話のある茶の間へ戻った。

薫は聞耳を立てながら、食卓に食器を並べていた。膳立てと食器のあと片づけが、薫に与えられた仕事であった。

母は苛立った声で相手を確かめている。また、あのいやないたずら電話が始まったのか、と薫は暗い気持になった。せっかくここのところ母の気持が落着いて、家の中も平穏さを取戻していたところだ。

母が激しい音を立てて受話器を置いた。薫はその音に怯えて、母の顔を窺った。母は薫と向き合って食卓に着いたが、何も食べなかった。

「どうしたの？」

薫は、おそるおそるたずねた。

「何でもないわ。早くお上りなさい」

口では何でもないと言いながら、眼の色が尋常ではなかった。

母は、食事の後片づけをしながら、何度も時計を見ていた。食器が洗い桶の中で激しくぶつかり合って割れそうな音をたてている。その音が不意に止み、母が濡れた手に先の尖った洋庖丁を握って玄関へ行った。薫は怯えた声で母を呼びながらあとを追うと、

「おばあちゃまのお部屋へ行っていらっしゃい」

叩きつけるような口調で言い、玄関の三疊の真中に坐り込んだ。

薫は、電話の女が、何か危険が迫っていることを知らせてくれたのだろう、と思った。父の留守に、寝たきりの祖母と、母と、子供の自分と、女が三人しかない家へ何者かがやって来るらしい。

早く父が帰って来てくれればいい、と薫は祈った。父が間に合わなければ、警察へ知らせたほうがいいのではないだろうか。しかし、それを母に言おうとしても、母の眼は異様に吊り上っていて、薫の言葉など耳にはいりそうになかった。祖母の部屋へ行っているようにと命じたが、もはや薫の存在など母の意中にはないようだった。

門の脇のくぐり戸につけてある鈴が鳴った。

母の肩が、痙攣するように動いた。父ならよいが、そいつだったたら母一人で大丈夫だろうか、